

第16回 日文研フォーラム



— 弥生時期日本に来た中国人 —

The Chinese Who Came to Japan in the Yayoi Period



汪 向 榮

Wang Xiang-rong

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 梅原猛

● テーマ ●

弥生時期日本に来た中国人
The Chinese Who Came to Japan in the Yayoi Period

● 発表者 ●

汪 向 榮
Wang Xiang-rong



発表者紹介

汪 向 榮

Wang Xiang-rong

中国中日関係史研究会常務理事・

国際日本文化研究センター客員教授

1920年生まれ

1940年日本留学

1978年中国社会科学院研究員（世界歴史研究所）と共に各大学教授を兼任

1986年中国社会科学院より停年退職

1984年より現職兼任、86年より専任

1986年5月から11月まで国際日本文化研究センター客員教授

専攻は中日関係史

主な著作：

1944：中日交渉年表（中国公論社）

（1949～78：研究論文などを発表することはできない。79年以後殆ど1年1冊出版、86年まで略）

1986：中日関係史文献論考（岳麓書店）

1987：中国的近代化与日本（湖南人民）

1988：日本教習（三 書店、日訳本は朝日新聞社出版）

1989：古代的中国和日本（三 書店）

その他中日関係史、日本古代史に関し論文が多数ある。

一、帰化人と移民

縄文時代の日本列島は生産が立ち遅れ、社会の発展も長い間に停滞していたが、西紀前三、四百年にいたって、強い外力の刺激のもとに、情況は一変した。採集経済から農耕経済へと進み、生産力の向上によって列島の社会もだんだん進展し、開化の域に入ったのが弥生時代であった。もちろん縄文晩期、日本列島のある地区では、時に農耕の痕跡が遺跡から見つけられる。しかし、この農耕、即ち縄文農耕の存在地域は極めて制限されているだけでなく、その耕作方式も簡単で、すこぶる原始的なものであったから、社会全体の生産方式を変更する力となるには至らなかった。縄文時代は数千年に及んだが、その内在的素因は社会の発展を促進する段階にはいまだならなかったわけである。それゆえ、西暦紀元前三、四百年ころ、日本列島が突然農耕を主とする弥生時代に入ったのは、主として外からの影響である。当時、この力強い外力は、列島の主な地区あるいは先進地区の生産方式を採集経済から農耕経済に変えた。変化はさらに東へ東へと拡大し、最後は日本列島の全体が停滞の縄文時代から文明の域に入った。

日本古代社会を論ずる場合、殊に先史時代の日本社会の発展に着眼するときには、当時列島の生産力を促進させたのが、外力作用であったことを認めなければ

ならない。もちろん、列島内部にあった素因の作用もあるが主なることではない。これは日本歴史学者の定説である。

世界のあらゆる国家、民族の社会の発展はみなそれぞれの素因をもつ。内在的なものもあり、外来的なものもあるが、その作用、又は社会の発展を促進する力の違いによつて、主と従、軽と重の別を分けることが出来る。日本列島の社会発展が縄文から弥生時代に進んだ素因の中に、縄文から伝承するものも、弥生の独自の素因もあるが、その中の主なものは、外来的素因の受入である。より具体的にいえば、中国大陸からの先進文明、生産技術と知識、例えば水稻の植付、金属器の製造と使用などを受入れたことである。

これら先進的文明、技術と知識は如何に外から日本列島に導入されたか。

古代、殊に先史時代、あらゆる知識と技術、あるいは文明の伝播は、人の往来によるしかない。実際、弥生時代とその後の古墳時代において、列島土着の人々ではない、大勢の外来の移民達が日本列島に来了。彼らは中国大陸の先進文明を日本列島に将来し、日本社会の発展に巨大なる貢献をなしたが、かつて日本歴史において、彼らは帰化人と呼ばれていた。

帰化という言葉も、やはり中国からのものである。知られているように、古代

において、中国の文明程度と生産面の発達は、遙かに周囲の民族、国家より高く先進していたから、自然に中国を中心として中華思想が生まれた。中国に定住した非中国本土の住民達は、みな中国の徳化を慕って移住した。それを帰化と称した。過去の日本においても、やはりこの中華思想と同様のものが生じ、日本に永住する外国人を帰化人といった。しかし、先史時代の日本列島の文明程度、生産発展のレベルは、中国と朝鮮に及ばないだけでなく、当時の日本列島には統一の政権すらない。中国か、朝鮮半島などから日本に移住した移民達は、明かに日本の王化を慕って来るのではない、だからこれを帰化ということとはできない。けれども過去の日本歴史学者は、皇国史観を持つ、日本支配者と同じ立場から、帰化という名詞を使った。はなはだ不適當なことであるからこの三、四十年来、極く少数の人を除いて、この帰化の名詞を使わず、渡来、渡来人と使い直した。これは当然のことと思う。

日本の立場からいえば、渡来という名詞は適當であるが、移出国家としての中国、朝鮮から見れば、渡来ということばは適切ではないから、私はかつてに移民という語を使っている。もちろんこれもあまり適切とはいえない。移民というのは、一般には計画的、組織的に外国へ移住することを指す。たとえば六、七十年

前の日本からブラジルへの移民、の如くである。しかし古代中国から他国に移住した人々は、多数は目的など持っていないのである。その中に非常に大きな移民集団もあるが計画的、又は組織的移住とは言えない。かれらは多く飢饉と兵乱を避けるため、別の地方へ逃亡し、あるいは酷政と迫害を避けるため外に亡命したものである。すなわち一定の目的をもたないので、移民という名詞を使うこともあまり適切ではない。が、中国人の立場からそれ以外更に適当なことばはない。帰化人にせよ、渡来人にせよ、移民にせよ、用語の問題にすぎず事実に対しては重要ではない。問題の實質は名詞ではないのである。

二、人数

縄文晩期から弥生時代に至って日本列島の社会発展に変化の生まれる段階に、外から移住した人々の数はどの位であろうか。これはまことに答え難い問題である。精確に答えることはもちろん出来ない。当時の事情として、それら移民を受け入れた日本に、文字にかかれた歴史はまだ存在していない。のみならず、多くの移民が経た土地であり、移民と多大なる関係を有する朝鮮半島にも文字に書かれた歴史はない。主な移民を出す中国には、すでに相当完全な文字の記録はある

が、これらの文字記録は主に漢民族支配者のことを記し、周囲の各民族、国家に対しては本当に簡略である。漢民族支配者に関係の薄い移民などについては、ほとんど記録はない。あっても極めて少ないのである。その記録から当時外国に移住した者の人数を計測することは不可能なことである。ことに当時日本列島に入った外来移民の多くは直接中国からではない。ほとんど朝鮮半島からであるから、中国の史籍にそれら移住の記録を見つけて、それを根拠として移民の数を計測することの可能性は全くないと思う。

しかし、日本列島に地下出土した遺物の、弥生時代のものは縄文時代のものと明らかに異なる。その遺物の中に、朝鮮半島や、中国大陸の遺物と似てるものがあり、全く同じものもある。この事実から、これらの遺物は列島に住んだ土着縄文人のものではなく、外来移民としての弥生人が残したものであると考えてよい。それから人骨の測定など各方面から総合的に見れば、古代国家を立てる以前、すなわち弥生だけではなく、古墳時代まで日本列島に進入した外国移民の数は極めて多いと認められる。

当センターの埴原教授はかつて、日本人を骨の形態から東北中心型と近畿中心型の二種類に分け、近畿型は近畿を中心に西日本にいるが大陸系に近い人たちで

あるとした。そのとき、彼は確実な人数は言わなかったが、形態から見れば、近畿型の人はかなり多いのである。その後、埴原教授は別の論文で非常に具体的論拠をあげつつ、弥生初代から初期歴史時代までの千年、即ち西紀前三百年から西紀七百年に至る間に、日本列島に移住した外国人は百万人以上に達すること、古墳時代における縄文系の土着民と渡来人の比率は一と九から二と八の間にあることを述べた。その推計は誠に驚くべきものである。それによると、今日の日本人の血統は、たいてい当時列島に來た外国移民と関係があることになるだろう。必ずしも渡来人の後裔でなくとも、混血は免れないからである。

この推計と事実の間に、距離があるだろうか。

一見すると、百万という数字は本当に驚くべきであるが、その百万は千年間の総計であり、年平均は千人位である。年平均千人であっても、先史時代の日本にあつては、やはり大きな数と言わなければならぬ。国立民族学博物館の小山助教授の推計によれば、縄文中期九州の人口は五千三百人、後期になつても一万人である。千人の外來移民とは、まことに大きな数である。しかし後世の文字記録や、地下出土の遺物から見ると、この千人という数字は決して多くはない。あるいは少ないくらいかも知れない。

『日本書紀』に秦造の祖や、漢直の祖などが朝鮮半島から日本に来たとき、あるいは百二十県の人夫を率いてとか、あるいは百二十県の黨類を率いて来たとか書いてある。一県の人数ははっきりしないが決して十人、二十人ではないと思う。もちろん、それらの記録には若干誇張もあり、そのまま信ずべきではないが、少なくとも彼らが日本に入るときは大集団的行動であり、少数ではない。ご存知のように、中国の史籍に徐福の記事があり、その中に「徐福は千人以上の若い男女と技術者など若干人を率いて海を渡る、平原広沢の地に至って止まり、再び帰らなかつた」とある。その「至るところ」は別の問題で、いま討議はしないが、徐福と一緒に国を出て、海を渡る人数は少なくない。大規模の集団行動である。もし彼一行の止まるところが日本列島なら、その大集団の人数は千人以上であろう。それゆえ、年平均千人という数は多くないのではないか。

事実上原始社会から封建社会に至っておれば、外来の人々が全く未知の土地に定住と生存を得られることはきわめて困難なことである。一人一人ではもちろん不可能である。少人数でもだめ。土着民と対抗出来る力を持たなければならぬ。中国の史籍、日本の史籍にかかわらず、移民、渡来人として記録する場合、みな集団的であり、大人数の行動とし、そのゆえに年間千人程度は外来移民が日

本列島に入つて定住する人数としては決して多くないと思う。

かれらは先ず朝鮮半島と最も近い北九州に入つて、定住した。同時に当時中国大陸の先進文明や、生産技術、知識などを彼らの手によつて列島に持ち込まれた。列島の生産力を上げたり、日本社会の発展と開化を促進したり、後世日本古代国家となる基礎を造ることに力を盡す。これら先史時代日本列島に入った外国移民達はほとんど再び故国に帰らなかつた。列島に定住し、日本民族の一員になつた。

三、何処から移入されたか

しかし、過去においても、いまになつても、それほど多人数の外来移民が連続的に列島へ入ることは簡単なことではない。ことに先史時代の日本列島は生産が低い状況にある。先進文明や、生産技術を有する集団的移民は何処から移入されたか。

もちろん文字的记录は残っていないが、多くの地下出土の遺物はよくこのことを説明している。外来移民は多く朝鮮半島から入つて来た。

日本は海に囲まれた島国で、大陸とは接していない。先史時代の造船、航海技

術のもとに中国から直接海を横切つて、日本に渡することは不可能ではないが非常にむずかしい。朝鮮半島から日本に渡るのはわりあいに簡単である。半島南端と日本の北九州の間は海を隔てるといへども、距離は近い。海面も静かで、原始的丸木舟なども潮に従つて海を渡ることは出来るから、古い時代から両地の人民は絶えまなく往復が出来た。従つて日本列島に來た外来移民は多く、あるいは主として朝鮮半島からである。

しかし朝鮮半島から來た人々が全部朝鮮半島の人ではない。彼らがもつて來た先進文明と生産技術、知識なども半島のものではない。当時、朝鮮半島の文明、知識レベルは日本に比べるともちろん高いが、中国よりは遙かに低い。しかも半島の文明、知識は大部中国から導入したものである。周知の通り長期にわたつて、中国人民は常に移民の形で、自国の先進文明や、生産知識などを他の民族、国家、特に周りの遅れた地域に伝えている。それらの地区に住んでいる土着民の生産水準を高めようとする。朝鮮半島はその中でも最も顕著な例である。

朝鮮半島と中国大陸とは境を接して、陸上は歩いても達することが出来る。海上も原始的丸木舟などを使って、沿岸航行しても半島に至る。日本列島に渡るような風浪の危険は少ないので中国の歴史上、社会上の大きな変動があるごとに人

口の大きな移動が行われる場合には、常に朝鮮半島の方へ逃れている。ここに大きな変動というのは、天災と人災を指す。天災すなわち水、旱の災に際し、多くの住民達は衣食生計を計るためにふるさとを離れ、遠い異地に行かなければならない。人災すなわち支配者の惨酷なる圧政に耐えきれず、やむえず異郷に逃げて命を助ける。原因の違いによってかれらの組成も違うし、目標とする到達地区の要求も同じではない。天災のため食を求める人々は貧乏の庶民で、ただ生活の出来るところ、衣食のみ足りる地区を探すだけが、圧政を避ける人達は庶民の外に、貴族、奴隸主や官吏らも含まれた。かれらは禍を避けるので、目標地区は必ず中国大陸の支配勢力の及ばないところであり、それは遠ければ遠いほどよい。ことに秦王朝が六国をほろぼし、中国全国を統一した際、また漢王朝が朝鮮半島を征服し、四郡を置いて以後は、安全の立場からいえば朝鮮半島は理想的避難地とはいえない。けれども朝鮮半島とただ一海の隔にある日本列島は大海の中に孤立した離れ島なので、強大なる大陸にある統治力は及ばないところであるから一番理想的な地区と認められる。従って数多くの中国人が本土を離れ、朝鮮半島に移居し、間もなく日本列島に転居することは、全くありえないこととはいえない。中国の史籍に、日本列島へ移住する中国人のことは記録されていないが、

朝鮮に移住の記録は、正史にも沢山ある。周の武王が箕子を朝鮮に封じる。燕王盧綰が朝廷に叛旗をひるがえし、匈奴に入った後、衛満は千余の亡命者を集めて、朝鮮に進出し、自ら王となる。あるいは辰韓の長老達は秦王朝の苛政を避けるため、朝鮮に行ったと語る。後漢書は、漢の初め中国は大乱となり、燕、斉、趙から朝鮮に逃げる者は数万人もあると記録した。實際上、秦漢の前に、大陸から朝鮮に禍を避ける人も相当の数と考えられる。漢の武帝に至って朝鮮半島は正式に大陸の行政権に入った。四郡を設け、数多くの官吏と庶民を朝鮮に送った。それゆえ西暦紀元前後、朝鮮半島の居民の中に中国大陸から来た人々の数量は極めて大量的と思われる。その数多くの中国移住民のうち僅かな中国東北地区の人を除けば、ほかはほとんど漢民族である。いうまでもなく、それほど多くの漢人のうちにあつて、きわめて多数は衣食のみを要求する庶民達である。かれらは働く人であり、深く、高い学問的知識はないが生産面の技術、知識は必ずもっている。これら生産面の技術と知識は、当時の中国においては、普通なものと思うが生産レベルの低い周囲の民族、国家に対しては先進的なものというべきである。前に述べたとおり、中国大陸の人口移動は周囲の遅れた民族や国家に大陸の先進文明や、生産技術、知識などを伝える、輸出する機会である。それらの民族、国

家は生産力を向上させ、社会の発展を得る。朝鮮半島の開化はその最も顕著な例である。日本列島でも同じで、長い間生産停滞にあった縄文期から弥生期へと移行したことも、この中国人口の移動と関係すると思う。

四世紀の初め、朝鮮半島北部にある高句麗が南下して、楽浪郡を滅ぼし、漢王朝の勢力が半島からしりぞけられるとき、大陸から来た中国人に、一部は海を越し、日本列島に渡った日本書紀に書かれてある秦帝、漢王の裔孫と自ら称する人々は恐らくこれらの人であろう。

弥生時期前後、数多くの中国移民が朝鮮半島を経て日本列島に至ったことは、伝説や史籍記録に筋書きを見るのみならず、日本の学者が出土した人骨を検証した結果もこの事実を証明している。九州大学の金関教授はかつて北九州と山口県で出土した人骨の特徴を分析して、これらの人骨は渡来人と縄文人の混血であることを主張し、長崎大学の内藤教授は西北九州の弥生人骨を分析して、九州平原地区のものは渡来人の特徴を有し、沿海地区のものはまだ縄文人のままでであると結論した。有明海地区出土の人骨は、この二つの特徴を共にもつ。内藤教授は平原地区の弥生人は農耕生産に従事し、沿海の人々はいまだ漁獵を主として暮すと主張した。今度吉野ゲ里から出土した人骨の分析にも渡来系の結論を得た。これ

ら分析の結果から、当時日本列島に來た中国移民の活動地区は主に生産レベル高い北九州地区であり、時間の流れに従って、北九州から九州、瀬戸内海、近畿に拡がったのであろうと推測される。

まとめていえば、縄文晩期以後、日本列島には数多くの中国移民が朝鮮半島を経由して渡來し、一番先に到達する地点は当時生産レベル高い北九州を中心とする地区であり、それから周辺より列島の各地に拡大した。かれらの移住したところはだんだんと在來の漁獵様式から農耕の生産様式へと変え、日本社会の発展に貢献した。けれども魚獵の様式が日本人民の間から消えたわけではないので、長い間にこの両種の生産方式が共存した。当時移民集中地区の北九州であっても例外ではない。

四、平和的移住ではない

移民、あるいは渡來人、歸化人たちが日本社会の発展になした貢献は、皆様はご存知のところでも再び述べる必要はないが、それら日本社会の発展になされた貢献は、移民達が長期にわたってしんぼうし頑張った結果であることについて述べておきたい。ことばをかえれば、かれらの移住は決して平和なことではないの

んな例は僅か一つではない。その他にも沢山ある。例えば朝鮮王衛滿、南越王趙陀らはみなそのような大きな力強い武装を持って、大規模な移民を行なった。かれらは新しい土地に到着し次第、武力によって土着民を征服し、統治したからこそ定住できた。そうでなければ、先進文明、生産技術と知識などの導入は全く不可能なことである。世界の歴史から見れば、古代、ことに原始社会に、平和的、あるいは話合の形で文明の伝播、知識の導入はほとんど出来ないことである。

この事實は、日本列島の出土遺物から証明できる。

九州に鏃傷、またはその他の武器によって傷をうけた人骨がかなり出土する。これら武器による傷を有する人骨は、みな戦闘の間に亡くなったものであった。もちろん集落同士の間にも戦闘は起こる。その場合にも戦死者が出るが、北九州と近い山口県土井ヶ浜遺跡から出土した人骨は、二つの異なる文化集団の激しい戦闘のため戦死したものであることを証明する。この二つの異なる文化集団とは、外来移民集団と土着民のことを指す。土井ヶ浜遺跡に、同じく弥生初期に属するが異なる地区文化を代表する須玖系土器と櫛目文土器が発見された。この発見から土井ヶ浜は当時この異なる地区文化の接点であると認められる。ここに出土した二百体以上の人骨は一体を除き、みな弥生初期の土層から出土したので

あった。これらの人骨には、多数抜歯と屈葬の特徴があり、これらの特徴から見れば、これらの人骨は縄文晩期に属する遠賀川系のものであると判断される。同時に、これら人骨の中に一般縄文人と違う長身の特徴をもつ男性人骨がある。この長身の特徴は当時の中国華北地区の人々のものであるから、おそらく縄文晩期から弥生初期までの、中国華北地区からの移民ではないかと考えられる。

これら人骨の中に、鏃傷を受けた人骨が少なくない。一人の男性の人骨には十六ヶの鏃傷があり、頭骨も砕けている。右腕には二つの貝輪があった。その鏃傷をうけた人骨と同時に出土した土器の状況から見ると、恐らく西紀前二、三世紀頃、即ち弥生初期に、土井ヶ浜で須玖系文化を有する外来移民集団と遠賀川文化系の土着民との間に、激しい戦闘が起こったことを認めなければならない。これら多くの人骨がその戦闘の激しさを証明するものである。遠賀川系の土着民の長身特徴もかれらが日本列島の原始的土着民ではなく、やはり中国華北地区から移住したものであると考えられる。彼らが日本列島に入った時期は須玖系の人達よりずいぶん以前であるから、金属器文化などはまだ知らなかったため、金属器文化をもつ須玖系移民集団との戦闘には敗北しなければならなかったのではないか。

いろいろな事情から見れば、弥生時期は先進文明や生産技術と知識を有する中国、朝鮮の大量移民集団が朝鮮經由、あるいは直接海を横切り、中国から日本列島に入った。激しい戦闘の後、土着民を征服し、支配し、その土地に定住した。次第に、知らず覚えずの間に中国の先進文明や、生産技術と知識を導入し、伝播した。言うまでもなく、移民集団が定着するには、そして農耕文化を導入することなどは、みな時間を必要とするものであるから、日本に農耕が始まったのは弥生初期、即ち西紀前二、三世紀ごろのことと考えられる。農耕文化が日本列島にもたらされた時期がこれよりずっと以前ということはないであろう。土井ヶ浜遺跡は恐らくその時期のものと推測される。

これほど数多くの中国からの移民は、中国のどこから来たのか。これは誠に答え難い問題であるが、地理の面と人骨の検証から言えば、華北地区が最も適当と思われる。前に述べたように、中国の史籍に日本列島へ移民すること、または亡命することは一つも記されていないが、兵乱を避け、圧政に耐えられず朝鮮半島に亡命する燕、齊、すなわち華北地区の人々は沢山いた。それから九州に大量出土された甕棺は、中国夏商から戦国時代まで華北地区に見られる墓葬であるが秦漢、すなわち西紀前二、三世紀に至ると、華北地区はもう使われていない。ただ

華北と華中沿海地区の貧乏庶民達はいまだこの簡単な甕棺を使っている。それから北九州に多く見られる高床式建築も、中国華北地区のものではない。華中、華南、ことに沿海の湿気の多い地区の建築様式である。日本の初期弥生時期農耕集落の代表的なものは板付遺跡であるが、この遺跡にある倉庫は穴倉であり、高床倉庫ではない。すなわち当時板付に農耕技術などをもたらした移民集団は、この以後とは異なる地区から来たことを認めなければならぬ。私は縄文晩期から弥生初期にかけて日本列島に進出した中国移民は多く華北地区からの人々であり、弥生初期後半から中期、後期の移民は主として華北、華中沿海地区からの庶民であると推定している。この点については、後漢書などの中国の正史にある秦王朝が中国全土の統一を行なおうとする時代は、華中地区、ことに沿海地区の琅琊郡などから多くの人々が朝鮮にやって来たと考えられ、そして楽浪郡の墓葬方式は当時江蘇省あたりのものと合致しているので、弥生初期後半に朝鮮半島を経由し、日本列島に入った中国移民は、これら華中地区と華北地区沿海の人々ではないかと考えられる。

もちろん弥生期に日本列島にきた外国移民達のほとんどが朝鮮半島經由であるが、かれらは日本社会の発展、生産力の向上に対し、莫大なる貢献をなした。こ

の移民集団の人々が朝鮮半島からにせよ、中国からにせよ、日本列島にもたらした文化と知識はみな中国からのものである。かれらは武力を使って日本列島の土着民を征服したが、その後、かれら自身は再び故里に帰ることはなく、日本民族の一員になったのである。

***** 発表を終えて *****

中・日両国の間に、一時“同文同種”のローガンが盛んに言われたが、私はこれを賛成しない。けれども両国の間に久しい歴史と深い関係が有ることは否定することの出来ない事実である。日本民族の開化、大和国家の成立に際し、外来移民の貢献は究めて大いことは認めなければならない。これら外来移民の中に中国人は無論入っていた。私はこの五、六年以来、先史時代日本に来た中国移民のことに関心を持ってきた。中国で若干論文を発表したが、資料不足のため、満足できるものではなかった。この度センターに招かれ、客員教授に就任した機会を利用し、吉野ヶ里遺跡、藤の木古墳遺跡などの見学が出来、日本方面諸碩学の警顔に接することが出来たのは誠に嬉しいことだった。ことに任期の終る前に、梅原所長の臨席を得、埴原教授司会のもとに、この発表をさせていたゞいたことは有難い。日本各界諸賢の御意見を聞くことは、私の研究に対し、本当に有益なることである。今、この発表を印刷し、より広く読者に捧げる。何卒、御遠慮なく、率直な御指摘と御教示を下されたい。将来の私の研究のために、中日両国永久的友好のために。

御教示は当センター気付、又は直接“中国北京小雅宝胡同二十四号”までお願いします。

汪向榮

日 文 研 フ ォ ー ラ ム 開 催 一 覧

回	年 月 日	発 表 者 ・ テ ー マ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORI ß EN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
5	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び－拳を中心に－」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像－現実と幻想－」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性－恵信尼の書簡－」
⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」

⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6. 13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
13	元. 7. 11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
14	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
15	元. 9. 12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑬	元. 10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
17	元. 11. 14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」
18	元. 12. 12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」

19	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
----	-------------------	---------------------------------------------------------

○は報告書既刊

非売品

発行日 1990年1月31日

編集発行 国際日本文化研究センター

京都市西京区大原野東境谷町2-5-9

電話 (075) 331-4101

問合先 国際日本文化研究センター

管理部・研究協力課

©1990 国際日本文化研究センター

■ 日時

1989年10月3日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

